

立教大学ジェンダーフォーラム主催 2020年度公開講演会

「フェミニズムが変えたこと、変えられなかったこと、そしてこれから変えること」

日 時： 2020年9月17日(木) 17:30~20:00

講 師： 小川たまか氏(ライター)、酒井順子氏(エッセイスト)、田中美津氏(鍼灸師)、佐藤文香氏(一橋大学大学院社会学研究科教授)、上野千鶴子氏(東京大学名誉教授、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)理事長)

会 場： ZOOM ウェビナー

2020年度公開講演会では「フェミニズムが変えたこと、変えられなかったこと、そしてこれから変えること」をテーマに異なる世代の登壇者をお招きし、世代間のフェミニズムの継承と断絶について、講演とパネルディスカッションを実施しました。

第1部では、登壇者おひとりずつフェミニズムやウーマン・リブにかかわるご自分の経験や思いを率直に語っていただきました。2000年代初頭に本学を卒業後ライターの仕事を始めた小川たまか氏は、共働き世帯で育った経験から女性が働くことについて、また性暴力に関する問題をネット記事で取り上げたところ、バッシングが激しく、その状況が今も続いていると語られました。男女雇用機会均等法成立直後に社会人となったエッセイストの酒井順子氏は、ご自身の経験も交えながら、『婦人公論』や『an an』などの女性向け雑誌を読み込み、女性が自分を男性より低く扱ってしまう「男尊女子」感覚の源流を追った分析について話してくださいました。そして田中美津氏は、ウーマン・リブの時代、女性たちが自分自身の生き難さや欲望と真剣に向き合い、自身の言葉で語り解放されるために集まって学んだといいます。当時の女性たちが歌や演劇などのさまざまな手段で発言をしたことが、田中氏自身の歌の実演によって鮮やかに示されました。

第2部では司会の佐藤文香氏がお三方の「世代」の違いを踏まえ、個人的な体験と社会背景との関連を詳しく説明してくださいました。その後のパネルディスカッションでは、Q&Aで寄せられた視聴者からの多くの質問にも触れながら、三人の登壇者が世代を越えてそれぞれの体験について意見が交わされました。議論の中では、法律や人々の意識は徐々に改善されているものの、ウェブ上で今もなお表明され続けるミソジニーや、生産性第一の社会構造は変わらないままという問題も提示されました。

最後の総括で上野千鶴子氏は、フェミニズムの大きな成果の一つが性暴力を明るみに出し問題化したことだと話されました。一方で、男性が優遇されている労働の岩盤規制を変えられなかったことが悔やまれ、また世代交代がうまく進んでこなかったことも反省し、若い人にフェミニズムを伝え、裾野を広げることによって、これからの社会を変えていってほしいと希望が述べられました。



本イベントは元々5月にタッカーホールでの開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で開催を延期し、ようやくオンラインでの開催に至ったものです。地方や海外にお住まいで普段は立教大学のイベントに参加できないという方からも多数のご参加をいただき、盛況のうちに幕を閉じました。素晴らしいご講演とパネルディスカッションをしてくださったご登壇者の皆様に心より感謝申し上げます。

(立教大学ジェンダーフォーラム事務局 横山美和・片岡佑介)